北魏洛陽北邙墓群の構成と變遷

村元健一

はじめに
第一章　平城期の皇帝陵と陪葬墓
第二章　洛陽期の北邙墓群――元氏を中心に――
第三章　洛陽期の陪葬と漢族の埋葬
第四章　洛陽期の葬送儀禮の變化
おわりに

はじめに

北魏の洛陽遷都後に築かれた北邙墓群は、多量の墓誌が出土したことで知られ、それを用いた研究も多い。中でも、墓誌出土地を記録した郭玉堂氏の『洛陽出土石刻時地記』（一九四一年刊。以下、『時地記』）を基に、北魏の墓群の構成原理を鮮卑の族葬に求められた宿白氏の論考は、この墓群の研究の方向性を定め、發表から四〇年を經た現在でも大きな影響を保ち續けている。(1) 宿氏の論は墓誌文と出土地の檢討に基づいた精緻なもので、繼承すべき點が多い。一方で、孝文帝の漢化政策の總仕上げともいうべき洛陽遷都後に新たにつくられた鮮卑墓群の構成原理が、鮮卑古來の葬俗に基づくという宿氏の說に從うのであれば、北魏史上の孝文帝の改革の評價にも關わる問題となる。宿氏の論說については夙に謝寶富氏が、

鮮卑の遺風と捉えることに疑義を呈されている。[2] 後述するように謝氏の指摘は今日の中國陵墓研究の進展をみても妥當なものが多く、宿說の再檢討が行われるべきだと考える。また、宿氏が研究の基礎とされながら、閲覧困難だった『時地記』が氣賀澤保規氏により復刻され、[3] 北邙墓群の研究條件は大きく整ったと言える。

本稿では、まずは平城期の北魏墓群の様子を概觀し、次に宿說の檢討を行った上で、遷洛後の北魏墓群の構成を時間軸に沿って檢討し、墓群形成がいかなる原則に基づき、北魏の皇帝權力とどのように關わっていたのかを明らかにしていきたい。

第一章　平城期の皇帝陵と陪葬墓

洛陽期の北魏墓地との比較のために、まずは平城期の様子を見ておきたい。平城期北魏墓群の最大の特徴は、最末期にいたるまで都城と皇帝陵區が切り離されていたことにある。平城期の皇帝陵は金陵と呼ばれ、今なお正確な位置すら不明だが、平城からはかなり離れ、都城から望見できなかったことは確實である。[4] ここでは金陵の陪葬に注目したい。『魏書』『北史』の各傳から陪葬者を抽出すると以下のとおりである。（　）は確認しえる歿年である。

宗室：江夏公呂、常山王素（和平三年・四六二）、彭城公勃、彭城王粟、長樂王處文（泰常元年・四一六）、任城王雲（太和五年・四八一）

長孫氏：上黨王觀、藍田侯肥（天賜五年・四〇八）、子の平陽王翰（神麚三年・四三〇）、翰の子の平陽公平成、肥の子の吳郡王陳（興光二年・四五五）

叔孫氏：丹陽王建（太延三年・四三七）、子の安城王俊（泰常元年・四一六）

奚氏：城陽公烏侯（興光年間・四五四―四五五）

車氏：宣城王路頭（泰常六年・四二一）

陸氏：平原王麗（和平六年・四六五）乙弗渾により殺害後、獻文帝により金陵に陪葬。
羅氏：帶方公斤、孫の趙郡公拔
源氏：隴西王賀（太和三年・四七九）南涼禿髮傉檀の子。
姚氏：隴西王黃眉（太武帝期）後秦姚興の子。明元帝皇后姚氏の弟。
王氏：眞定公建　平文皇后王氏の兄弟の孫。
司馬氏：琅琊王楚之（和平五年・四六四）東晉の宗族。

出自を見ると、宗室以外の長孫氏、叔孫氏、奚氏、車氏は『魏書』官氏志の言う帝室十姓であり、陸氏は後に八姓とされる名族であり、羅氏も「代の人なり。其の先 世よ部落を領し、國の附臣と爲」った鮮卑の有力氏族である。また、長孫、叔孫、羅の各氏については數世代にわたって埋葬されたことが確認できる。その他の源賀、姚黃眉、司馬楚之は北魏と對峙していた國の皇族であり、また姚氏、王氏は外戚でもある。一見すると、前漢や後漢などの漢族王朝の陪葬墓と同様に、皇帝の恩寵を示すために功臣や高官を皇帝陵に陪葬させた様に見えるが、[5] 陪葬者の多くが鮮卑族であり、漢族を始め、鮮卑以外の北族の高官の陪葬がほとんど見られないことに大きな特徴がある。先に見た姚黃眉や司馬楚之は例外となるが、對立する王朝の皇族を北魏歷代の墓地に迎えいれるという政治性を有した處置だったのだろう。ただし楚之の爵を襲った司馬金龍の墓は平城で發見されていることから、[6] 司馬氏の金陵陪葬は楚之一代であり、長孫氏のように數代にわたる埋葬ではない。

このように金陵に陪葬されたのは、宗室以外は主に鮮卑の有力氏族であり、宿白氏が指摘されるとおり、金陵の本來の姿とは北魏皇帝を中心とした鮮卑族の墓地なのである。この墓地の構成を規定するのは鮮卑族の習俗であり、北魏に多大な功績のあった漢人官僚の埋葬は確認できない。これが皇帝の恩寵として王朝に貢獻した功臣や大官を陪葬していた漢族王朝の陪葬との最大の相違點である。

平城期では皇帝、皇后および拓跋鮮卑の有力氏族は都城近郊に埋葬されなかった。この時期の平城郊外の墓地については向井佑介氏と曹臣明氏の研究があり、その成果によりつつ以下にまとめておく。[7] 向井氏の整理によると、太武帝期から中原風の磚室墓が築かれるようになり、太和期に増加する。また墓域については皇帝・宗室および貴族の一部が金陵に埋葬され、それに次ぐ高位のものが平城東郊に、それ以外の官人は南郊に埋葬されたとされる。曹氏は道武帝以前から平城期の北魏墓の變化を蹟附けられ、平城東郊と南郊の墓群を中部、南遠郊の「桑乾區」を南部と區分される。「桑乾區」の墓群とは東晉南朝から平城に移った人々の墓地である。[8] このように平城に伴う墓地は東郊から南郊にかけて廣がっており、埋葬者の出自や身分により墓域が分けられていた。東郊の墓群は、向井氏が指摘されるように、スロープ狀の墓道を持つ大型磚室墓が多く、中でも太和元年（四七七）埋葬の幽州刺史燉煌公宋紹祖、太和八年歿の冀州刺史琅琊王司馬金龍の墓の存在が注目される。宋紹祖については史書に記載がないが、張慶捷・劉俊喜氏らは敦煌の豪族宋氏出身で、太武帝の北涼平定に伴い平城に徙民された一族とされる。[9] 宋紹祖および司馬金龍は平城南方の桑乾に埋葬された他の亡命漢人とは異なる處遇を受けていたことになる。なお、宋紹祖墓は墓群を構成しており、向井氏は、墓群が比較的短期間で築かれていること、方位をそろえることから家族墓地であった可能性を指摘されており、筆者もその見解が妥當と考える。墓の地上施設の痕蹟は明かでないが、太和年間には宗室の拓跋忠の墓に碑を建立した事例がある。[10] 墓が地上に標識を立て、さらに磚室墓を築くようになるなど、漢族の文化を採り入れながら大型化する傾向を認めることができる。ただし、華北に本貫を持つ漢人高官の墓群は平城郊外で確認されていない。北魏の漢族の埋葬を分析された室山留美子氏は、漢族は本貫地への埋葬が禁じられ、特に獻文帝による平齊郡設置以降嚴格化し、それが解かれるのは洛陽遷都後であると指摘されている。[11] 漢族の家族墓の多くが平城南の桑乾に集中する可能性もあるが、ここでは、鮮卑と漢族の葬地が分けられていたこと、墓が磚室墓となり、大型化する傾向、卽ち漢化していたことを確認しておきたい。

平城期は最末期の文明太后馮氏の永固陵造營とそれに伴う孝文帝壽陵の造營にいたるまで皇帝陵が都城近郊に營まれる

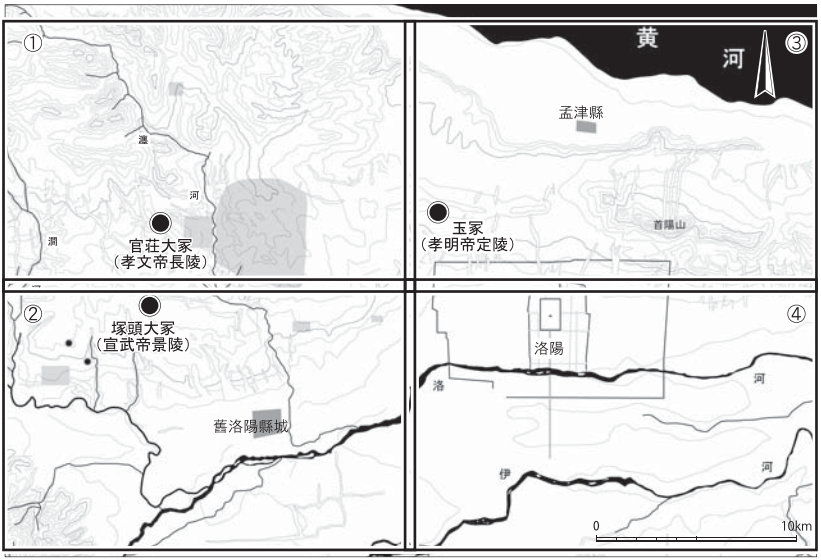
ことはなく、當然ながら漢の皇帝陵のように、都城近郊に功臣の墓を隨えた皇帝陵は認められない。[12] 馮氏に孝をつくすことを目的に孝文帝が太和一五年（四九一）に壽陵を永固陵の附近に造營したことは、北魏皇帝陵の都城郊外への移動として特筆される。[13] また都城と陵墓（永固陵）は皇帝による謁陵を通じて密接につながるようになり、文明太后への孝文帝の孝を視覺的に示す役割を擔った。同時に皇帝陵の移轉は金陵への陪葬を停止させた可能性がある。このように北魏皇帝陵は、平城期の末に、歷代漢族の皇帝陵、特に後漢のものに近い樣態をとるようになり、洛陽遷都を迎えることになる。

第二章　洛陽期の北邙墓群 ――元氏を中心に――

洛陽の北魏墓群については、『魏書』卷七下・高祖紀下の太和一九年（四九五）六月條に、

丙辰、詔すらく遷洛の民、死すれば河南に葬り、北に還るを得ずと。是に於いて代人の南遷する者は、悉く河南洛陽の人と爲る。

とある。北邙の北魏墓地は、遷洛の人々の本貫が洛陽とされ、河南への埋葬が强制されたことから政治的につくられたものである。皇帝陵も洛陽遷都後は永固陵と同樣に都城郊外に築かれる。總じて平城末期の流れを受けて墓地が造營されたと言える。以下の行論にも關係するため、洛陽北魏墓群が立地する北邙上の墓の分布を概觀しておきたい［圖］。北魏の都洛陽の北に東西に延びる黃土の臺地が北邙である。邙山の漢魏洛陽城の北方にあたる朱家村から三十里鋪にかけてが後漢の皇帝陵區であり、朱家村から東の首陽山までは後漢の陪葬墓區が廣がる。北魏が墓區を設定したのは後漢皇帝陵區との重複を避け、さらに西側となっている。[14] 北魏墓群は南流して洛河に注ぐ瀍河により東西に二分されており、瀍河西岸に北から孝文帝の長陵、宣武帝の景陵が築かれる。瀍河東岸の姚凹、南・北陳莊、張（障）羊、鄭家凹、後海資、徐家溝の各村一帶が元氏墓誌の集中的に出土する場所である。以上の墓の分布と地形をふまえ北魏墓群を見ていくが、檢討に先立ち宿白氏と諸先學の主な研究を概觀しておく。

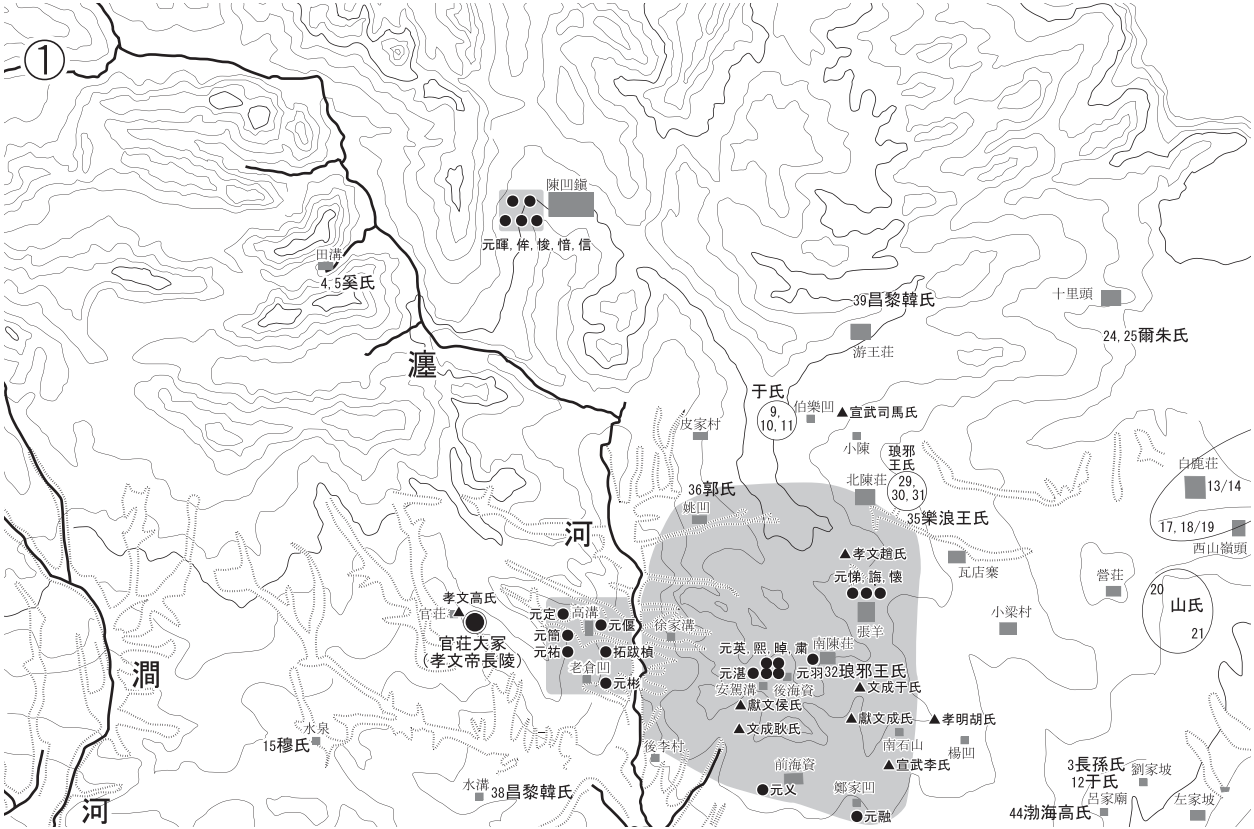


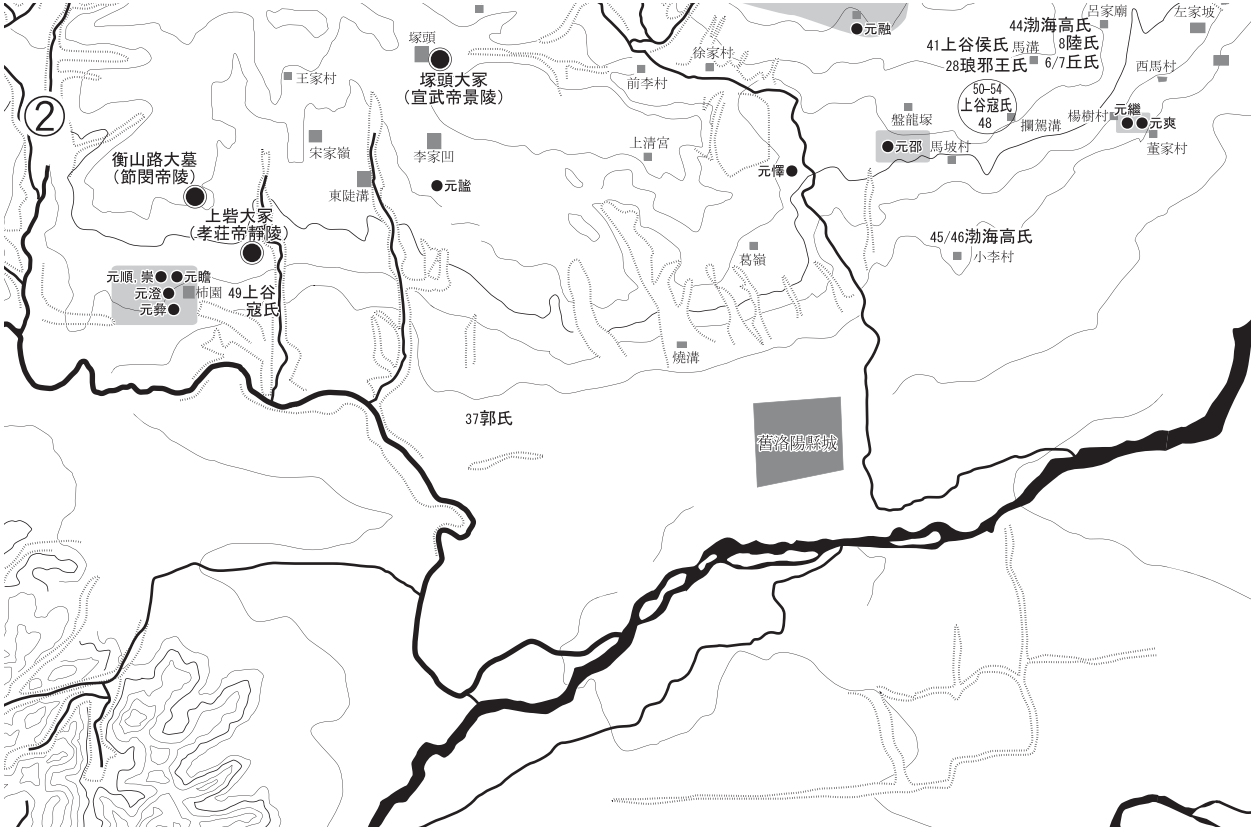
圖は上掲のように四分割し掲載している。圖中の凡例は以下のとおり。

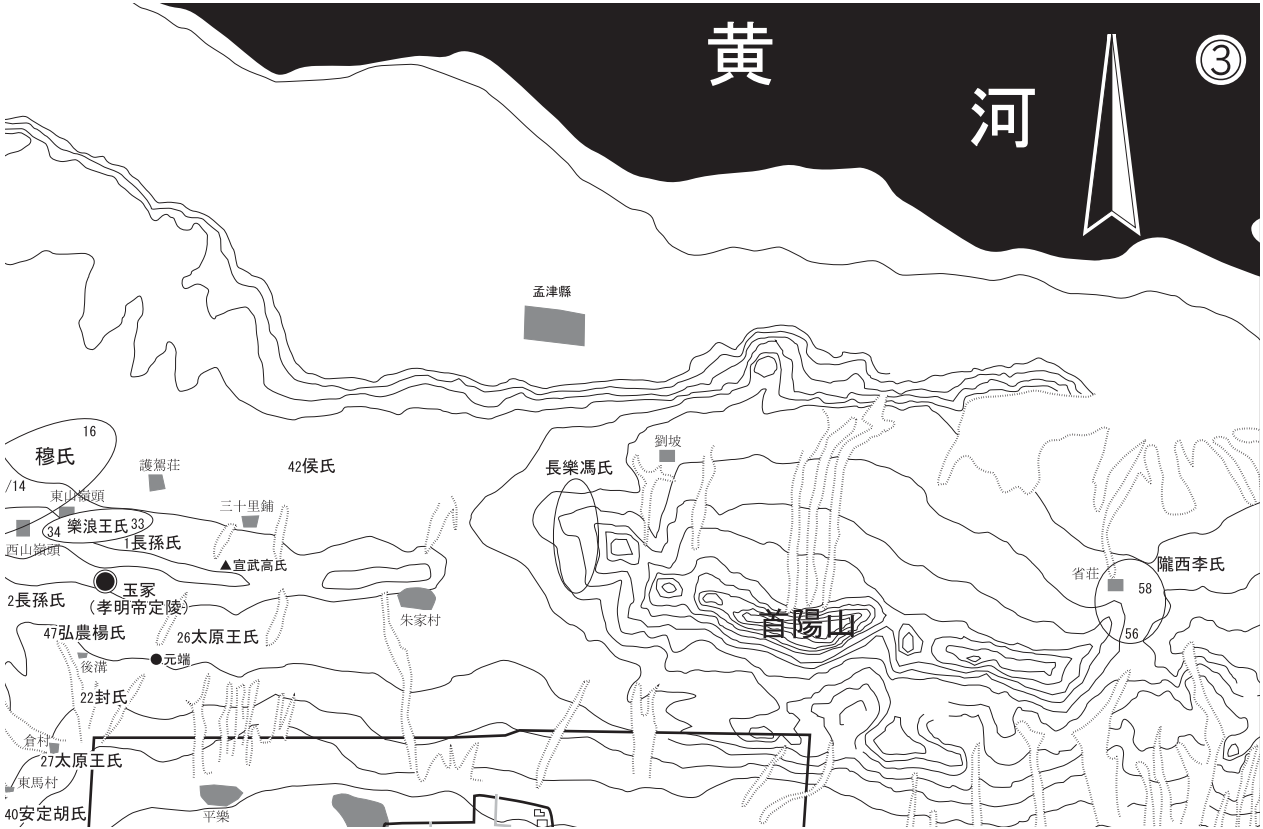
◉…皇帝陵
▲…皇后および妃嬪の墓誌出土地
●…主な元氏の墓誌出土地
▒…元氏の墓群の範圍
■…現代村落
※各墓の位置は『洛陽出土石刻時地記』に基づく。
※圖中の番號は元氏以外の墓を示し、下記の一覧と對應(57, 59～61は葬地未詳)。

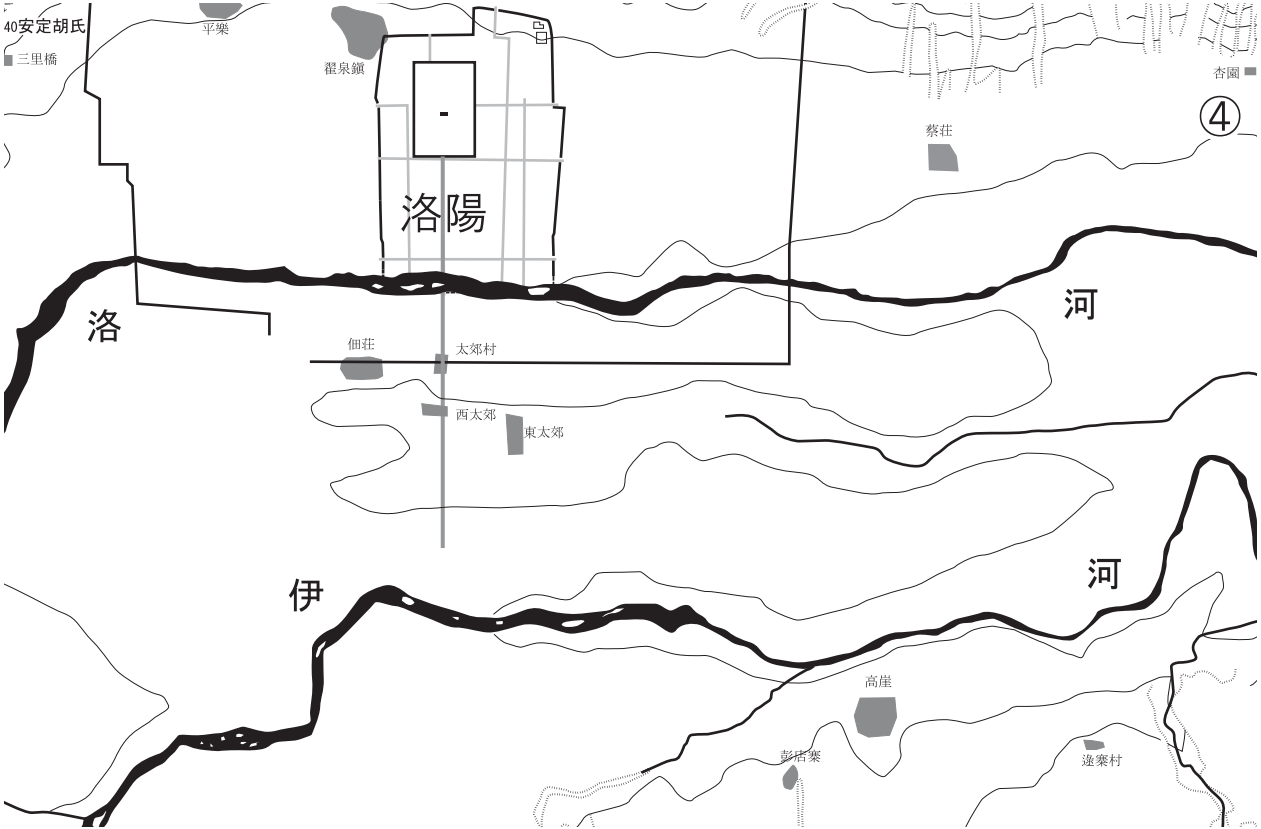
長孫氏　1子澤, 2瑱, 3宋靈妃(長孫士亮妻)
奚氏　4智, 5眞
丘氏　6哲, 7鮮于仲兒(威遠將軍太尉府功曹參軍丘氏妻)
陸氏　8紹
于氏　9和醜仁(鉅鹿郡開國公于氏妻), 10景, 11纂, 12纂
穆氏　13亮, 14尉氏(穆亮妻), 15纂, 16循, 17紹, 18彥, 19元洛神(穆彥妻)
山氏　20徽, 21暉
封氏　22昕, 23長孫氏（輕將軍給事中封氏妻）
爾朱氏　24襲, 25紹
太原王氏　26鍾兒, 27昌
琅琊王氏　28翊, 29誦, 30元氏(王誦妻), 31元氏(王誦妻), 32紹
樂浪王氏　33禎, 34基, 35溫
太原郭氏　36顯, 37定興
昌黎韓氏　38顯宗, 39震
安定胡氏　40胡毛進
上谷侯氏　41剛, 42掌, 43忻
渤海高氏　44廣, 45猛, 46元瑛(高猛妻)
弘農楊氏　47乾
上谷寇氏　48臻, 49猛, 50憑, 51演, 52治, 53偪, 54霄, 55慰
隴西李氏　56彰, 57超, 58薤
長樂馮氏　59熙, 60誕, 61聿

圖　北魏洛陽北邙墓群
陸地測量部五萬分の一地形圖「孟津縣」「大口」「陳凹」「洛陽縣」を基に作成


①
陳凹鎮
元暉, 侔, 悛, 愔, 信
田溝
4, 5奚氏
瀍
河
39昌黎韓氏
十里頭
24, 25爾朱氏
游王莊
干氏
9, 10, 11
伯樂凹
▲宣武司馬氏
皮家村
小陳
琅邪王氏
29, 30, 31
北陳莊
白鹿莊
13/14
36郭氏
姚凹
35樂浪王氏
17, 18/19
西山嶺頭
▲孝文趙氏
元悌, 詢, 懷
瓦店寨
營莊
20
山氏
21
小梁村
張羊
孝文高氏
官莊
官莊大冢
(孝文帝長陵)
元定
高溝
元偃
徐家溝
元簡
元祐
拓跋楨
老倉凹
元彬
元英, 熙, 晫, 肅
南陳莊
元湛
元羽32琅邪王氏
安駕溝
後海資
▲文成于氏
▲獻文侯氏
▲獻文成氏
▲孝明胡氏
▲文成耿氏
南石山
楊凹
後李村
前海資
▲宣武李氏
3長孫氏
12于氏
劉家坡
呂家廟
左家坡
44渤海高氏
●元乂
娜家凹
●元融
澗
水泉
15穆氏
水溝
38昌黎韓氏
河


②
塚頭
塚頭大家
(宣武帝景陵)
王家村
衡山路大墓
(節閔帝陵)
上砦大家
(孝莊帝靜陵)
宋家嶺
東陡溝
李家凹
元謐
元順, 崇
元瞻
元澄
柿園
49上谷
寇氏
元彝
37郭氏
徐家村
前李村
上清宮
元懌
葛嶺
燒溝
舊滎陽縣城
元融
盤龍塚
元邵
馬坡村
41上谷侯氏
馬溝
28琅邪王氏
44渤海高氏
8陸氏
6/7丘氏
50-54
上谷寇氏
48
攔駕溝
楊樹村
呂家廟
左家坡
西馬村
元繼
元爽
董家村
45/46渤海高氏
小李村


黄
河
③
孟津縣
16
穆氏
/14
護駕莊
42侯氏
長樂馮氏
劉坡
東山嶺頭
三十里鋪
樂浪王氏33
34
西山嶺頭
1長孫氏
▲宣武高氏
玉冢
（孝明帝定陵）
2長孫氏
47弘農楊氏
26太原王氏
朱家村
首陽山
省莊
58
56
隴西李氏
後溝
●元端
22封氏
倉村
27太原王氏
東馬村
40安定胡氏
平樂


40安定胡氏
三里橋
平樂
翟泉鎮
洛陽
杏園
④
蔡莊
洛
河
佃莊
太郊村
西太郊
東太郊
伊
河
高崖
彭店寨
逸寨村

宿氏の論説の要點は北邙北魏墓群の構成原理を鮮卑の部族制に求め、漢族王朝の皇帝陵と陪葬墓からなる墓群とは異質のものとしたことにある。宗室である元氏は、出自する皇帝の系統、例えば景穆帝系、文成帝系毎に固まって墓群を構成し、さらに道武帝系の墓群を中心として、右に明元・景穆帝系、左に太武・文成帝系の宗室墓が分布するとされる。さらに宗族墓地の周邊に鮮卑有力氏族及び鮮卑の降臣や漢族の墓群が族葬によって築かれたとする。氏は族葬墓地について、『周禮』春官・冢人に「先王の葬は中に居り、昭穆を以て左右と爲す。凡そ諸侯は左右の以前に居り、卿大夫士は後に居り、各おの其の族を以てす」とある姿を典型とされ、このような墓地は中原では西周から春秋期に確認できるが、戰國時代末から前漢初頭にかけて家族墓へと移行している。したがって、洛陽北魏墓群の族葬は漢族の葬俗に由來するものではなく、鮮卑固有の習俗に基づくものという理解となる。この學説は盜掘された墓誌の出土位置を『時地記』により復原し、さらに墓誌の丹念な讀み込みにより導き出されたものであり、説得力に富む。また、結論が鮮卑固有の習俗を色濃く殘すという、北魏の漢化の問題についても一石を投じており、今なお大きな影響力を持っている。

宿氏に對し全面的に反論されたのが謝寶富氏である。謝氏は、宿氏が「原始族葬の餘風」とする北魏墓群の構成原理を否定し、北歸を望む鮮卑貴族の想いを斷ち切るための政治的な墓地設定とする。また、墓群内には家族墓地の秩序はあるが、出自の帝系毎のグループは認められないとし、宿氏が指摘するような鮮卑の遺風による族葬はなく、太和年間以降に急速に進む漢族風の家族墓地の集積と見なしてよいとされた。

窪添慶文氏は宿説を概ね繼承しつつ、墓群の形成を時系列で整理され、皇帝子孫の系列毎に墓地が豫め定められていたことを指摘し、墓域の配置から、孝文帝によって平文帝から改めて太祖とされた道武帝系を中心に景穆、文成、獻文、孝文の系統からなる宗室體制が可視化されたものと説かれる。(15)

向井佑介氏は邙山北魏墓群が皇帝陵を頂點に皇族、貴族の墓を配したことを認め、その目的は洛陽に居地と葬地を與えることで階層や士庶の秩序を明確化にすること、集權的な身分秩序の體現にあったとされる。(16)

以上の先學の研究はいずれも宿氏の說を軸に展開されている。宿氏の說を檢證するため、元氏の墓の分布狀況を確認しておく。[17] 墓誌の出土地については『時地記』に基づく。[18] ただし、［圖］には一部の墓の位置しかプロットしていない。宗室元氏が出自する皇帝毎にまとまりをもっていたという點については、紙幅の關係もあり、特徵的な事例のみ取り上げる。まずは孝文帝が最も配慮したと考えられる叔父の文成帝系皇子と、自身の兄弟である獻文帝皇子の墓を概觀する。文成帝系では皇子五人の系統のうち、安樂王系一例（詮。墓主名、以下同）、齊郡王系五例（簡、祐、演、禮之、子永）、安豐王系一例（延明）の墓誌出土地が確認できるが、安樂王系は伯樂凹村北、安豐王系は小梁村、齊郡王系は瀍河西岸の高溝村と瀍河東岸の元氏墓密集區である張羊村に分かれる。このように文成帝系の三王系の墓群に限っても一箇所には集中せず、王統毎にまとまるのみである。獻文帝系では、獻文帝の六人の皇子のうち、墓誌が見つかっているのは趙郡王系六例（謐、毓、昉、煥、譚、譿）、廣陵王系一例（羽）、高陽王系一例（端）、北海王系三例（詳、顥、頊）、彭城王系四例（勰、子直、子正、文）の五王家一五例である。うち廣陵・北海・彭城の三王家の墓域は南陳莊に集中している。一方で趙郡王系は瀍河東岸の安駕溝・徐家溝と瀍西の李家凹村とに分かれており、瀍東のものは先の三王家の墓地とは東西に少し離れている。高陽王系のものでは河陰の變で殺害された元端夫婦の墓誌が東方の後溝村で見つかっているだけである。高陽王系のものを例外と見なしても、決して獻文帝系の皇子の墓地が一箇所にまとまるわけではない。この傾向は最も墓誌出土量の多い景穆帝系でも同樣である。

例外は明元帝系と太武帝系で、それぞれ一箇所に集中するが、それは明元帝系が樂安王系の、太武帝系が臨淮王系のそれぞれ一王統の墓誌だけが發見されているからにすぎない。このように墓群の構成の基本は王系毎の血緣によるものであり、宿氏が帝系毎にまとまりを見出されることには贊同できない。以上の檢討をふまえ、時系列に沿って北邙墓群に檢討を加えていきたい。行論の關係上、まずは元氏を中心に檢討したい。

①孝文帝期

洛陽で最初の北魏皇帝陵である孝文帝長陵の陵地の決定時期は明かでないが、太和一九年（四九五）の代北への埋葬禁止を上限とする。また洛陽出土で最古の元（拓跋）氏墓誌は、太和二〇年一一月埋葬の南安王拓跋楨（景穆帝系）のもので、出土地は長陵に近い瀍河西岸の高溝村西南である。以後、太和年間に宗室がその周邊に墓を築いていることから、太和二〇年ころには長陵の場所も決まっていた可能性が高い。[19] 孝文帝期には瀍河以西に長陵の位置が決められ、それに近接する瀍河西岸地域および瀍河東岸の邙山上が宗室元氏の墓地とされたのである。また、元氏の墓は單獨で營まれたのではなく、始葬墓を中心にそれぞれ子孫の墓地が築かれた。太和年間の事例は少ないが、太和二三年死去の章武王元彬は瀍西に埋葬されており、葬地は墓誌に「託附先墳」と記される。元彬は叔父の章武王太洛を繼いでいるが、『北史』の傳によれば、太洛は皇興二年（四六八）に死去しており、墓誌のいう「先墳」とは太洛のものではなく、實父である南安王の拓跋楨のものであり、南安王系統の宗室が拓跋楨の墓を中心に墓域を設定していたことが分かる。すでに窪添氏も指摘されるように、太和年間には瀍河以西は決して皇帝の占有する陵地ではなかったのである。

②宣武帝期

宣武帝期のものとして、南安王直系の中山獻武王元英、その子の熙、熙の子の晫、英の弟怡の子の肅の墓誌が見つかっているが、その場所はいずれも瀍河以東である。また瀍西に埋葬された章武王彬の子で、王位を襲った融や弟の湛の墓も瀍東にある。しかも元融の妃であり融と瀍東に合葬された穆氏の墓誌には「芒山の陽、南安王の塋に附す」とあり、南安王墓と瀍河を挾んで東西に離れたこの地が南安王系の塋域と認識されていたことを示す。宣武帝期に景陵（宣武帝陵）の場所を新たに設定するにあたり、瀍河以西の標高の高い場所を皇帝陵區とし、同地には原則的に宗室の墓を設けないようにしたと考えられる。窪添氏や劉連香氏[20]が指摘されるように、墓地の配置は孝文帝期の狀況から大きく變更されたのである。變更の時期は以下のことが手掛かりになる。景明元年（五〇〇）一一月に埋葬された河間王元定（景穆帝孫）の葬地は

孝文帝期と同様に瀍河西岸にあるが、翌二年七月に「長陵之東崗」に埋葬された廣陵王元羽（獻文帝皇子）の墓は瀍東に築かれている。このことから葬地設定の變更時期は、宣武帝卽位後閒もないころとなろう。以後、瀍河以東の徐家溝、安駕溝、北陳莊、南陳莊、前海資、後海資一帶が宗室の葬地となり、瀍西は皇帝占有の陵區とされた。瀍西への宗室埋葬に規制をかけ、宗室墓群からの皇帝陵の地理的隔絶を目指したものといえる。

③孝明帝期

孝明帝陵である定陵は瀍西ではなく、宗室墓地のさらに東方に築かれており、洛陽遷都後の皇帝陵の立地としては異様である。これは靈太后胡氏により殺害されたことに起因するのであろう。[21] 孝明帝期には、宗室の墓地設定に皇帝・皇太后權力の介入が顯著に見られる。それは元氏の家族墓地から切り離された場所に特定の者の墓が築かれることに現れる。確認される事例は靈太后胡氏や皇帝の意向を反映したものであり、元乂、元懌を例として擧げることができる。いずれも政爭の末に殺害された人物で、自然死を遂げた者ではないが、兩者の葬儀を見ておきたい。孝昌二年（五二六）に死去した元乂の葬送について墓誌は以下のように記す。

皇太后親しく哭弔に臨み、哀 百寮を動かす。薨自り葬に及ぶまで、賵贈 加うる有り。中使を遣わし喪事を監護せしむ。朝服一襲・蠟三百斤を賜り、布帛一千三百匹、錢卌萬を贈り、祠るに太牢を以てし、東園轜車・挽歌十部を給し、賜うに明器を以てし、卒を發し衞從せしむるに、都自り墓に及ぶ。

靈太后の妹の夫ということもあり、非常に手厚い埋葬が行われたことが分かる。これを踏まえて注目したいのは、元乂の墓が、父である江陽王繼と、父の弟の爽の墓から離れていることである。繼と爽の墓は元氏の墓地が集中する安駕溝、南陳莊一帶から東にはずれ、北邙の南斜面にあたる董家村周邊にある。[22] 元乂墓だけが元氏墓が集中する前海資村に營まれ、しかも確認された墳丘の規模は直徑三五メートル、高さ二〇メートルとかなり大型である。[23] このことから考えると、皇室の意圖により本來の家族墓地から離れた場所に墓地を賜與され、大規模な墓を築かれることが恩典の一つとなっていたと

考えられるのである。

その點で參考になるのが元乂の政敵だった清河王元懌の墓である。懌が殺害されたのは神龜三年（五二〇）だが、埋葬は孝昌元年（五二五）である。墓誌には、

加うるに殊禮を以てし、鑾輅九旒、虎賁班劍百人、前後部羽葆鼓吹、轀輬車一、彭城武宣王の故事に依る。其の黄屋左纛は漢の大將軍霍光の故事に依り、錫九命を備う。

とある。元懌の葬儀は靈太后と孝明帝の主導によるものであり、特別な配慮がなされたことは墓誌に記された葬列の規模からも窺える。墓は標高が低いものの瀍河西岸に築かれている。河陰の變で殺害された息子の元邵は瀍河の東岸に埋葬されており、また元懌の兄弟である臨洮王愉の系統は元邵墓のやや東方の馬坡村周邊に、廣平王懷の系統は宗族墓が集中する張羊村にそれぞれ墓地を形成している。[24] このことから清河王墓地も本來は瀍東であった可能性が高い。また元懌墓の墳丘規模は直徑三〇メートル、高さ一五メートルと大型である。[25]

このように、殊禮をもって埋葬された元乂、元懌はいずれも本來の墓地から離れた場所に築かれ、墳丘も大規模なものとされた。この點に皇太后や皇帝の意志が反映されたと考える。なお、元懌と同様に孝明帝期に瀍西に埋葬された例として、神龜二年（五一九）埋葬の文成帝系の齊郡王元祐を擧げることができる。父である順王簡は太和二三年（四九九）に瀍西の高溝村に埋葬されており、これ自體は既述のように問題はないが、孝明帝期にその子の元祐までが瀍西に埋葬されたのは異例である。墓誌には「賻贈の厚きこと、禮 常倫を越ゆ」とあり、これも特殊な事例に數えることができるのだろう。

以上のように、孝明帝期には通常の宗室とは異なる埋葬が、政治的な思惑をもって、皇太后・皇帝の主導により行われていた。この點を考えるにあたり次の史料を參考としたい。『北史』卷十七・景穆十二王傳上・元脩義傳には、

明帝の初め、表して庶人禧・庶人愉等、前愆を宥すを請い、葬を陵域に賜らんことを陳ぶ。靈太后詔して曰く「收葬

の恩、事は上旨に由る。藩嶽何ぞ職を越え陳ぶるを干すを得んや」と。

とある。元禧・愉はいずれも宣武帝期に反亂に關わり死去している。そうした者を北邙の宗室墓地に埋葬するか否かは皇帝の判斷によるものとされていたのである。とりわけ政爭の中で落命した宗族の墓をどこに築くかは、死者の復權だけでなく遺族の地位とも密接に關わる問題であることから、皇帝による宗室支配の一つの手段となっていたと考えられる。

第三章　洛陽期の陪葬と漢族の埋葬

前章までは元氏の墓を中心に北邙墓群の變化を見てきた。次に漢族の北邙での埋葬を確認することにしたい。この點については室山留美子氏の優れた研究がある[26]。本章では氏の研究をふまえ、特に皇帝から墓地を賜與された事例を中心に檢討していくことにする。

その前にまずは史料上「陪葬」とされた事例を確認しておきたい。盛樂金陵と異なるのは遷洛後に「陪葬」されたのが、正史上で確認される限りでは、太和二三年（四九九）に死去した趙郡靈王元幹と神龜元年（五一八）年に歿した外戚の胡國珍のわずか二例だけであることである。胡國珍は後に檢討するとして、先ずは元幹を見ておきたい。元幹は獻文帝皇子で、孝文帝の異母弟である。官は司州牧に至り、孝文帝の南征時には都督中外諸軍事とされていたが、後に免官されており、殊勳のあった人物とは言い難い。彼の墓誌は未發見であり、したがって墓の場所も不明であるが、幹の王爵を繼いだ子の謐が皇帝陵區のやや南方、瀍西にある李家凹村の南側に埋葬されている。その年代が正光五年（五二四）という遲い時期であることから、太和年間に死去した幹も瀍西に埋葬されていた可能性が高い。それでは瀍西への埋葬だけが「陪葬」とされたのであろうか。次に墓誌に記された埋葬地に注目したい。

墓誌に皇帝陵名が記される事例の多くが、皇帝陵を起點にどの位置に埋葬されたかを示すにすぎないため、それらは檢討から除外し、［表］の一七方の墓誌を對象とする。まず、長陵に陪葬ないし附葬された例は一・二・五～七である。景

表 「陪葬」に關わる墓誌

番號	名前	爵など	系譜	沒年	享年	埋葬年	埋葬場所	出土地
1	元鑒	武昌王	道武帝玄孫	正始3年5月26日	43	正始4年3月26日	附窆長陵之東崗	前海資村北
2	元緒	樂安王	明元帝曾孫	正始4年2月8日	59	正始4年10月30日	附塋於高祖孝文陵之東	安駕溝
3	元演		文成帝孫	延昌2年2月26日	35	延昌2年3月7日	葬於西陵高祖孝文皇帝之兆域	張羊村西北一里
4	元珍		平文帝六世の孫	延昌3年5月22日	47	延昌3年11月4日	窆于河南東垣之長陵	北陳莊南陵
5	元靈曜		景穆帝曾孫	正光3年11月10日	37	正光4年3月23日	祔葬長陵	後海資村西北
6	元襲		景穆帝曾孫	永安2年6月21日	44	太昌元年11月19日	陪葬長陵	安駕溝村
7	元讚遠	廣川縣開國侯	景穆帝玄孫	永熙2年2月27日	32	永熙2年11月25日	陪葬長陵之東崗	南陳莊南
8	元騰		明元帝曾孫	正始4年4月11日		神龜2年11月9日	窆於長陵之東北皇宗之兆	徐家溝東北
9	元乂	江陽王	道武帝玄孫	孝昌2年3月20日	41	孝昌2年7月24日	窆於成周之北山長陵塋內	前海資西南大塚
10	司馬顯姿	宣武帝第一貴嬪夫人	司馬金龍孫	正光元年12月19日	30	正光2年2月22日	陪葬景陵	伯樂凹村東
11	李氏	宣武帝嬪	固安侯李靜孫			孝昌2年8月6日	葬於洛陽景陵垣	南石山南
12	趙氏	孝文帝之九嬪		延昌3年8月13日	48	延昌3年9月28日	山陵之域	張羊村北陵、北陳莊村南
13	成氏	獻文帝之嬪		延昌4年正月9日	72	延昌4年2月9日	山陵之域	南石山村之西北
14	元擧		景穆帝玄孫	孝昌3年3月27日	25	武泰元年2月21日	葬于邙山倍帝之陵	安駕溝村西北
15	元彥	樂陵王	景穆帝曾孫	熙平元年9月24日	47	熙平元年11月10日	金陵	南陳莊西北
16	元顯魏		景穆帝曾孫	正光6年2月7日	40	孝昌元年10月26日	金陵	後海資村北
17	元某		景穆帝曾孫	正光6年2月7日	40	孝昌2年10月26日	金陵	

陵に陪葬されたのは一〇であり、一二～一四は「山陵之域」「倍帝之陵」として帝陵名を附けない。一五以下の三例は「金陵」と記されている。これらの一七方の墓誌の出土地はいずれも瀍河の東である。また被葬者は宗室元氏が一三例、殘り四例は皇帝の妃嬪である（一〇～一三）。葬地を見ると、元氏の一三例は徐家溝・後海資・南陳莊・安駕溝といった最も宗室墓が集中する地區内にある。つまり、長陵に陪葬された場所とは、「金陵」とされた南陳莊・後海資を包括しており、さらに言えば、八にあるように「皇宗の兆」であり、九でいう「長陵塋内」ということになる。妃嬪を見ると、「山陵の域」とされた孝文帝嬪の趙氏、獻文帝嬪の成氏は、張羊村から南石山村にかけて埋葬されており、宗室元氏の埋葬區に隣接する。元氏墓域に隣接するという點では北に外れた伯樂凹村に埋葬され「陪葬景陵」とされた宣武帝夫人司馬顯姿の墓も同様である。つまり、墓誌で見る限り「陪葬」とされたものは、瀍東に集中して埋葬された宗室元氏と、その縁邊に葬られた妃嬪ということになり、その墓の分布範圍が皇帝陵「金陵」の一部と捉えられていたことになる。これらの墓地より皇帝陵に近い瀍西の元氏墓群も陪葬墓區とされていたと考えるのが妥當であろう。

以上のように正史と墓誌の記載から、北魏洛陽期の陪葬およびそれに類する埋葬形態を抽出して檢討を加えたが、陪葬對象者は宗室元氏か妃嬪のみということになった。それでは元氏以外の場合はどうであろうか。

盛樂金陵に陪葬されていた鮮卑有力氏族には帝室十姓といわれる長孫、叔孫、奚、車氏があり、八姓の陸氏もあった。一方、洛陽の北邙北魏墓群では十姓の長孫、奚、丘氏と、[27] 八姓の于氏、穆氏が確認される。葬地は元氏墓域を圍むように分布する。宿白氏が指摘されるように氏族毎にある程度まとまっているように見受けられるが、現狀の出土狀況を見る限り、それが氏族埋葬なのか家族墓地なのかを判別できる量ではなく、漢族にも共通するように血縁による墓群を構成していたことが分かるだけである。[28] これらの鮮卑有力氏族が「陪葬」されていたと記す事例はない。これは盛樂金陵との大きな相違點であるが、これは孝文帝による一聯の漢化政策と、いわゆる太和二〇年の謀反により、鮮卑有力氏族の王朝内での力が大きく削がれたことと關係していると考えられよう。[29]

鮮卑の墓地に混在するように、漢族の四姓の一つである太原王氏の墓誌、その他、琅琊王氏、樂浪王氏、上谷侯氏、上谷寇氏の墓誌の出土地が確認される。太原王氏の墓誌の出土は僅か二方であり、うち王鍾兒は比丘尼統であり、やや特殊な事例である。そうすると太原王氏で検討可能なのは長樂侯王昌一人だけとなり、どれほどの規模の墓群を築いていたかは明らかにできない。有力漢族では琅琊王氏出身の王肅の子の紹の墓誌が南陳莊村附近で、肅の長兄融の子である誦とその妻元氏の墓誌がやや北の北陳莊村で發見されており、宗室元氏と同じ墓域に埋葬されている。しかし、これは例外で、他の漢族は元氏や妃嬪墓の外縁に分布する傾向を認めることができる。漢族については以上の墓域と異なる事例がある。それが孝文帝に重用された李沖、孝文帝外戚であった馮氏の埋葬地である。

李沖は隴西李氏の出身で、孝文帝期を代表する漢族の高官である。太和二二年（四九八）に死去した彼の埋葬については『北史』巻一〇〇の傳に詳細な記事がある。

> 是に於いて司空公を贈り、東園祕器一具・衣一襲を給し、錢三十萬・布五百匹・蠟二百斤を贈る。有司 謚を奏し文穆と曰う。覆舟山に葬り、杜預の冢に近きは、孝文の意なり。後に車駕 鄴自り洛に還るに、路 沖の墓を經、左右以て聞す。孝文 疾に臥するも、墳を望み掩涕すること之を久しうし、太常を遣し祭を致さしむ。

孝文帝の意志により西晉の名臣杜預の墓の近くにある覆舟山に埋葬されている。首陽山の北側にある省莊村周邊では李沖の兄承の子の蕤[30]、孫の彰らの墓誌が見つかっており、李沖の埋葬後、李氏塋域となっていたことが分かる。皇帝により墓地が指定され、そこが家族墓地となることは金陵に陪葬された鮮卑有力氏族と同様であるが、李氏の墓地は長陵や元氏墓群のはるか東方、後漢陪葬墓群をさらに東に超えた場所にある。當然ながら李沖墓から長陵を見通すことはできない。本貫である隴西から切り離され、都城近郊に墓群を形成してはいるが、正史にも李蕤墓誌にも「陪葬」とは記載されず、狀況から見ても陪葬とはみなしがたい。

李沖と同様の事例が、太和一九年（四九五）に死去した長樂信都の馮熙・誕父子の事例である。兩名の墓誌については

劉連香氏による考證がある。[31] 劉氏の說は多岐にわたるが、馮氏の墓地の比定について見ておきたい。墓誌の出土地は孟津縣と偃師市の境としか分からない。馮熙墓誌は葬地を「河南洛陽之北芒」とするだけだが、『魏書』卷八三・外戚傳上では孝文帝が馮熙の柩を洛陽の七里澗で迎えたとある。劉氏は、『河南志』、陸機『洛陽記』に七里澗を洛陽の東にあるとするため、墓も洛陽東方にあったとされる。[32] 一方、馮誕は墓誌によると「乾脯山之陰」に埋葬されたとある。「乾脯山」は洛陽の北東にあたり、劉氏は、ここを馮氏父子の埋葬地とされる。以上の劉氏の說は妥當だと考える。近年、馮熙の子の聿の墓誌が見つかっており、誌文には埋葬地を「乾脯山之陽」と記し、[33] 乾脯山山麓が馮氏塋域ということになる。そうすると孝文帝の信賴が厚かった馮氏父子の墓も、孝文帝の長陵から離れていたことになる。[34] 劉氏は、その理由について、洛陽に埋葬された最初の大官である馮氏の墓地を洛陽近郊の北邙上に求めると、漢魏晉の皇帝陵區を避ければこの地域しかないが、狹小であり、北魏皇帝陵區まで設定することはできず、結果として帝陵は遠く離れた瀍西に築かれることになったと說かれる。しかし、先に見た李沖の死去は太和二二年であり、すでに太和二〇年ごろには長陵の位置が決まっていたにもかかわらず東方に埋葬されている。この點を重視すれば、孝文帝が馮氏や李氏の墓を皇帝陵から遠く離れた場所に設定したのは、意圖的なものと考えるべきであろう。[35]

同樣に、南朝から亡命し、景明二年（五〇一）に死去した琅琊王氏の王肅も「其れ沖・預の兩墳の間に葬れ」とあるように、[36] 西晉杜預の墓と李沖墓の間に埋葬された。李沖がこの地に埋葬された經緯は先に見たとおりだが、孝文帝期では漢族出身で功績のある者の埋葬場所としてこの地が選ばれたようである。

以上見たように、李沖、馮熙・誕父子、王肅が葬られたのはいずれも首陽山の周邊である。この地は洛陽に近く、地勢も墓地にふさわしいことに加え、西晉の功臣杜預も埋葬されていたことから、漢族高官の埋葬地とされたのである。彼らの墓が元氏や鮮卑有力氏族の墓地から離れていることから、北族と漢族の出自による區分が殘っていたことも考えられる。先に見たように元氏墓群の周圍には漢族の墓群もあるが、南朝からの亡命者である琅琊王氏の他は、上谷の侯氏、寇氏な

どであり、いわゆる四姓とされる名族の大規模墓群はない。華北に本貫を持つ彼らは郷里に埋葬されるのが基本だったのである。[37] この問題に關して、室山留美子氏は上谷の寇氏は洛陽遷都以前から洛陽に關係していた可能性を指摘された上で、南朝からの亡命者である琅琊王氏の王肅、さらに本貫との關係が希薄であった隴西李氏や長樂馮氏は、皇帝との關係を重視して洛陽に墓を營み、逆に本貫地との關係を強く維持している氏族は歸葬を前提にしていたとされており、從うべきであろう。[38] 陪葬という觀點からみると、室山氏も述べられるように、李氏、馮氏とも皇帝から墓地を賜與されてはいるが、その場所から考えて、陪葬とは言い難い。第四章で後述するように洛陽期の北魏は葬列の規範を西晉に求めており、杜預の墓周邊に自身の漢族の寵臣を埋葬したのは、西晉の繼承王朝を強く意識していたことも一因だと考えられる。[39]

このように孝文帝期には有力な漢族高官および外戚であっても陪葬されることはなかった。ところが孝明帝期の胡國珍の事例は異なる。國珍は宣武帝の皇后胡氏の父であり、本貫は安定郡である。『北史』巻八〇・外戚傳には、

始め國珍 祖・父に就き、西のかた舊鄉に葬られんと欲す。後に前世の諸胡の多く洛に在りて葬らるるに緣り、洛に終わるの心有り。崔光 嘗て太后の前に對し國珍に問うらくは「國公 萬年の後、此に在りて安厝するを爲すか、長安に歸るを爲すか」と。國珍言えらく「當に天子の山陵に陪葬さるべし」と。病危うきに及び太后請うに後事を以てするに、竟に安定に還らんことを言う。語りて遂に惛忽す。太后 清河王懌と崔光等に問い、去留を議せしむ。懌等皆な病亂を以て、先の言に從わんことを請う。太后 猶お崔光の昔 國珍と言うを記し、遂に墓を洛陽に營む。

國珍が、洛陽か本貫地のいずれに埋葬されるかを迷った原因として「前世の諸胡」が多く洛陽に葬られたことを擧げているが、現在のところ安定胡氏で墓誌が發見されているのは國珍死後の孝昌三年（五二七）埋葬の胡毛進のみであり、「前世の諸胡」の墓地の實態は不明である。それはさておくとして、國珍が父祖の眠る舊鄉への歸葬の想いを絶ち、「當に天子の山陵に陪葬さるべし」と考えたのは、外戚としての自身の立場を考えてのことであろう。北魏では外戚の陪葬は盛樂金陵には存在したが、孝文帝にその意識がなかったのは先に馮氏の事例で見たとおりである。宣武帝期には生母文昭皇后

高氏の一族の高肇が重用されたが、孝明帝期になると、文昭皇后の長陵への遷葬・合葬に加え、[40] 高氏一族の北邙への埋葬が確認される。これは皇帝と皇后の嫡出子が皇統を繼承するという漢族王朝的な皇統の可視化であり、同時に北魏で初めて皇帝生母として皇太后となった靈太后胡氏が、皇太后の權威を強化するための施策とも考えられる。この流れの中で、靈太后の生母である太上君皇甫氏の墓の莊嚴化が圖られた。『北史』巻八〇・外戚傳には、

太上君 景明三（五〇二）年 洛陽に薨じ、此に於いて十六年なり。（靈）太后、太上君の墳瘞卑局なるを以て、更めて增廣せんとし、爲に塋域・門闕・碑表を起こす。侍中崔光等奏すらく「案ずるに漢の高祖の母、始め謚して昭靈夫人と曰い、後に昭靈后と爲し、薄太后の母 靈文夫人と曰い、皆な園邑三百家を置き、長丞をして奉守せしむ。今 秦太上君、未だ尊謚有らず、陵寢孤立す。卽ち秦君の名、宜しく終稱を上り、兼ねて掃衞を設け、以て情典を慰むべし。請うらくは尊謚を上りて孝穆と曰い、權に園邑三十戸を置き、長丞を立て奉守せんことを」と。太后 之に從う。

とあるように、宣武帝期に死去した皇甫氏の墓は「卑局」なものであり、その狀態は孝明帝卽位まで變わらなかった。胡氏が皇太后となり、初めてその墓の規模が問題視されたことになる。かつて指摘したように、この時期には墓の規模が重視される風潮が醸成されていた。[41] 妻の大墓の存在が、國珍の墓地造營場所の惱みに繫がった可能性がある。胡氏の墓地については、胡毛進墓誌が三里橋村で發見されているが、國珍の墓の位置は不明である。先に見た王肅の子の紹の墓は元氏宗室墓群內に存在した。これは王紹の姉妹の王普賢が宣武帝夫人となり、紹の娘も孝明帝の嬪になっているという外戚の地位によると考えられる。王紹の死去がちょうど孝明帝卽位直後であることから、この時期に外戚も陪葬されるべきという認識が生まれたのであろう。[42]

前章で見たように、北魏北邙墓地の基本構成は宣武帝期に整理され、瀍河を挾んで西を皇帝陵區に、東を宗室墓地とし、隣接して皇帝の妃嬪の墓を配するものとなった。墓誌で確認する限り、この範圍が陪葬墓區であり「金陵」となる。その周圍に帝室十姓や八姓といった有力な鮮卑貴族の墓地が配されるが、盛樂金陵と異なり、これらの墓は「陪葬」とは記さ

れない。また、その塋域と重なりながら、太原の王氏、弘農楊氏、渤海高氏などの漢族の墓が確認できるものの、墓群を構成するものは少ない。特に漢人で最も家格が高いとされた四姓の墓は太原王氏の墓がわずかに確認できるのみで、その他のものはなく、漢族で本貫が北魏の領域にあったものは室山氏が指摘されるように歸葬されていたと考えるべきである。

洛陽北魏墓群の本質を、宿氏が説かれるように「河南洛陽の人」となった鮮卑を中心とする墓群とすることに異論はない。一方で有力な漢人である李沖に始まる隴西李氏や孝文帝の外戚である馮氏の墓群は、邙山墓群から東にかなり離れた場所に營まれていた。彼らは生前、皇帝と親密であり、功績も大きかったが、「陪葬」されたとは見なし難い。以上のことから皇帝陵とそれに近接する墓との關係は、殊勳や官位を基準とした漢晉の陪葬とは明らかに異なるものであったことが分かる。洛陽期の北魏の陪葬とは宗室と妃嬪だけで構成され、孝明帝期には外戚が加えられる。漢晉の陪葬のように君臣關係に基づくものではなく、血縁と婚姻を基準とするものであった。この現象を、宿白氏が指摘されるように、鮮卑族葬の遺風と見ることも可能だが、漢族も宗室、妃嬪、外戚を陪葬することは同様であり、一概に鮮卑の習俗とは言えない。章を改め別の角度から検討したい。

第四章　洛陽期の葬送儀禮の變化

漢人社會では葬送儀禮の可視化・盛大化は前漢以降顯著であり、薄葬が重視された魏晉期でも高官の葬送の儀仗の編成は故事として再生産されてきた。北魏の葬送の儀仗については虎賁、班劍の階層性に着目された石井仁氏の研究がある。(43) 氏の研究は前漢霍光以來の歴代の權臣が恩典として與えられた特權と、それが故事として各王朝に踏襲される様子を追ったものであり、北魏では霍光故事の系譜を引く西晉安平王司馬孚の故事が權臣に、やや小規模化した「尉元故事」というべきものが大臣に、それぞれ適用されたとされる。本章では平城期まで遡り北魏の葬送儀禮の整備されていく過程を見ていくことにしたい。

平城期の葬送儀禮は鮮卑の習俗が強く遺されている。[44] この時期に葬送の故事とされたのが明元帝の泰常元年（四一八）に埋葬された安城王叔孫俊の葬儀である。その葬儀の様子を確認しておこう。『魏書』巻二九・叔孫建附長子俊傳に、

泰常元年卒す、時に年二十八、太宗甚だ之を痛悼し、親しく臨み哀慟す。朝野 追惜せざる無し。侍中・司空・安城王を贈り、孝元と謚す。溫明祕器を賜い、載するに轀輬車を以てし、衛士もて導從し、金陵に陪葬す。子の蒲、爵を襲う。後に大功の有るもの及び寵幸の貴臣薨ずれば、賻送終禮、皆な俊の故事に依り、之を踰ゆるを得る者無し。

叔孫俊の葬儀で特筆されるのは、溫明祕器の賜與、轀輬車の使用、衛士の導從である。この葬送の規模が故事とされた。叔孫俊の葬送の故事を採ったものに、明元帝期に死去した崔宏・車路頭・穆觀、太武帝期の長孫翰の四例があるが、太武帝期以降に高官の葬儀の故事となった盧魯元の葬儀は叔孫俊の故事に依っており、同一のものである。盧魯元の故事を採ったものは文成帝期の車尹洛、孝文帝延興元年（四七一）歿の宿石の二例である。これらは全て平城期に執り行われた葬禮であり、對象者は崔宏を除いて鮮卑の有力者であり、叔孫俊の故事が洛陽遷都以前の鮮卑有力者の葬送の規範となっていたことが分かる。この時期の葬禮の基調は鮮卑族のものであり、衛士による導從がどれほど十分に整備されていたかは明らかではない。ただ叔孫俊傳に擧げられた要素を考えると、葬列の莊嚴化を重視したことは認められる。

孝文帝期には從來の葬送儀禮に大きな變革が加えられる。[45] 孝文帝自身の葬送儀禮も南朝出身の平齊戸である劉芳の作成したものであり、漢族の葬送儀禮が導入されていた。このことからも窺えるように孝文帝期の葬送儀禮の漢化は顯著である。ちょうど遷洛時期にあたる太和一八年（四九四）の安定王拓跋休の事例を見ておきたい。『魏書』巻一九下・景穆十二王列傳・安定王休傳には、

將に葬らんとするに及び、又た布帛二千匹を贈り、謚して靖王と曰う。詔して黄鉞を假し、羽葆・鼓吹・虎賁・班劍六十三人を加うること、悉く三老尉元の儀に準ず。高祖親しく送りて郊に出で、慟哭して返る。諸王の恩禮 焉に比するは莫し。

とある。病床にある休を孝文帝が見舞っているが、同年二月から孝文帝が平城に滞在していることを勘案すれば、休は平城で死去し、葬送もこの地で行われたと考えられる。ここで規範とされたのは尉元の事例である。『魏書』巻五〇・尉元傳から葬送の様子を確認しておく。

（太和一七年）八月、元 薨ず、時に年八十一。詔して曰く「…布帛綵物二千匹 溫明祕器・朝衣一襲を賜うべし、併せて爲に墳域を營造せよ」と。諡して景桓公と曰う。葬るに殊禮を以てし、羽葆、鼓吹を給い、黄鉞・班劍四十人を假し、帛一千匹を賜う。

このように葬列の構成に虎賁の有無や人數に違いがあるものの、拓跋休の葬送儀禮が尉元のものを踏襲したことは認められる。先にみた叔孫俊の事例と比べるならば、葬列の構成の詳細まで指示されるようになっている。平城期の最後の段階で行われたこうした葬送儀禮の變化が洛陽遷都後に繼承されることになる。

北魏の大官の葬送儀禮に大きな變化が見られるのは、石井氏が指摘されるように孝文帝洛陽遷都前後にあたる馮熙・誕父子の事例であり、そこで故事とされたのは西晉の安平王司馬孚のものである。[46] 北魏がこの段階で西晉以來の葬送を導入することができたのは、叔孫俊の故事がすでにあり、葬列を莊嚴化する漢族の葬送儀禮の故事を受け入れる素地があったからであろう。比較のため、西晉安平王司馬孚の葬送の様子を見ておきたい。『晉書』巻三七・安平獻王孚傳には以下のようにある。

泰始八年薨ず、時に年九十三。帝 太極東堂に於いて擧哀すること三日。詔して曰く「…其れ東園溫明祕器・朝服一具・衣一襲・緋練百匹・絹布各おの五百匹・錢百萬・穀千斛を以て、以て喪事に供せ。諸ろの施行する所、皆な漢の東平獻王蒼の故事に依れ」と。其の家 孚の遺旨を遵び、給する所の器物、一に施用せず。帝 再び喪に臨み、親しく拜し哀を盡す。葬に及び、又た都亭に幸し、柩を望みて拜し、左右を哀動す。鑾輅輕車・介士武賁百人・吉凶の導從二千餘人・前後鼓吹を給し、太廟に配饗す。

皇帝の親臨に加えて虎賁百人と導従二千人餘、および前後の鼓吹という大規模な葬列が注目される。このように皇帝の恩寵を明示できる儀仗の賜與が故事となったのである。以後、北魏の葬禮は平城時代の叔孫俊の故事は用いられず、廣陵王、廣陽王、あるいは西晉琅琊王のものが用いられるようになる。試みに孝文帝期以降の葬禮の典據を列記すると以下のとおりである。（　）は歿年、注記のないものは『魏書』による。

西晉安平獻王司馬孚故事：馮熙・誕（太和一九年・四九五）、彭城王元勰[47]（永平元年・五〇八）、任城王元澄（神龜二年・五一九）、清河王元懌（正光元年・五二〇）、爾朱榮（永安三年・五三〇）

西晉琅琊武王司馬伷故事[48]：劉昶（太和一二年・四九八）

廣陵王故事：北海王元詳（正始元年・五〇四）

廣陽王故事[49]：崔光（正光四年・五二三）

孝文帝期の流れを經て、宣武帝期には北魏の要人の葬送の規範が確立されていたことが窺える。それを示すのが廣陵王元羽の葬儀である。羽の葬禮は『魏書』巻二一上の傳によれば、

世宗 親しく臨み、哀慟し、詔して東園溫明祕器・朝服一具・衣一襲・錢六十萬・布一千匹・蠟三百斤を給し、大鴻臚に喪事を護せしむ。大殮には、帝 親しく之に臨み、哀を都亭に擧ぐ。使持節・侍中・驃騎大將軍・司徒公・冀州刺史を贈り、羽葆鼓吹・班劍四十人を給し、謚して惠と曰う。葬に及び、帝 親しく送に臨む。

とある。班劍の規模から石井氏が尉元「故事」に聯なるものとされるとおりである。元羽は第二章で見たように、確認できる中では宣武帝期で初めて瀍河東岸に埋葬された王である。羽は孝文帝の弟、宣武帝の叔父であり、宣武帝が自身に近い宗族を丁寧に埋葬しながらも、これまで埋葬が許されていた瀍西ではなく瀍東に墓地を設定することで、皇帝陵と王墓とを地形上で峻別していたことを認めることができる。葬列の制度も漢文化の傳統に則し、霍光故事に聯なる西晉安平王故事と、それを縮小した尉元の葬禮に聯なる廣陵王故事へと變換した。それは虎賁、班劍に見られるように葬列の莊嚴さ

に現れるもので、視覺的に認識が容易なものである。先に觸れたように葬列自體は平城期から存在し、これに漢族傳統の儀仗を加えることで葬列の演出效果を高めたのである。洛陽期の葬列に多くの見物人がいたことは、孝莊帝の葬送が參考となる。『洛陽伽藍記』卷一に、

太昌元年（五三二）冬に至り、始めて梓宮を迎え京師に赴き、帝を靖陵に葬る。作る所の五言詩は卽ち挽歌の詞と爲る。朝野、之を聞き、悲慟せざるは莫く、百姓の觀る者、悉く皆な掩涕するのみ。

とある。悲劇的な死を遂げた皇帝の葬列のため、一般化できないかもしれないが、大規模な葬列を都下の人々が注視したことは容易に想定できよう。葬列は多くの人々に見られるものであるために、規模に明確な差をつけ、故人への皇帝の恩寵の程度を示すことができた。このように皇帝から下賜された葬列の規模が王朝內での故人の地位を可視化する。そうした處置を死者や遺族も榮譽と感じ、受容することは、與える側である皇帝の權威を高めることにつながる。この點は、これまで述べてきた北魏の墓葬にかかわる變革と軌を一にする。また、葬儀の改編が漢魏の傳統に則ることを重視していたことにも注目したい。洛陽遷都を挾んだこの變化は葬送全體の漢化の傾向を顯著に示すものである。このように考えると、前章で檢討した血緣に基づく墓群構成原理も、鮮卑の葬俗を殘すことに拘泥した可能性は低く、漢族と同樣の墓群構成を目指したものと考えるほうが蓋然性が高いと考えるのである。

おわりに

以上述べてきたことをまとめておく。北魏洛陽では、皇帝陵を基準にして大規模な墓群が北邙上に築かれており、墓群の外見は隣接する後漢皇帝陵區と類似する。その構成原理を見ると血緣を重視したもので、宿白氏の說の妥當性を示すように見える。しかし仔細に檢討すると、元氏以外の各氏族の墓は事例が少なく、また、元氏墓の配置は出自する皇帝每のまとまりは弱く、王系、つまり家族墓地の集積と見なした方が妥當な事例が多い。この點については鮮卑族葬の遺風とす

る宿氏の説よりは謝寶富氏の説が妥當と考える。

では遷洛後の北魏はどのような意圖で墓群を築いたのだろうか。この墓群は墓の構造や葬列の構成など、總體として漢化の所産というべきものだが、臣下を同じ基準で陪葬する漢族王朝のような皇帝陵區を形成することはなく、鮮卑と漢族との間の軋轢を十分に克服するには至らなかったと言える。孝文帝は皇帝陵と宗室墓群が近接する墓群を構想し、漢族の葬地をかなり離れた場所に設定した。これは盛樂金陵及び平城郊外の墓群の様相に近い。宣武帝期には瀍河西岸を皇帝陵區に設定し直し、宗室墓群は瀍西から排され瀍東に集中するようになり、この宗室墓群が陪葬墓區となる。平城期の金陵と異なり、鮮卑の中から元氏のみを陪葬し、元氏の優位性を示したのである。こうして、北邙墓群において、鮮卑内の、皇帝――宗室――その他の鮮卑という階層性が明示されることとなる。これは元氏以外の鮮卑有力氏族の力が大きく削がれたことを反映したものであろう。孝明帝期には外戚が陪葬されるようになる。さらに、皇太后・皇帝が元氏の葬地を決める事例が頻出し、皇帝による墓地の設定が宗室支配の手段となっていたのである。北邙北魏墓地は短期間で變遷が見られるが、それは時々の政治情勢に對應した結果であり、皇帝權力の强化のために、墓の配置を巧みに利用したということは一貫していると言える。

註

（1）宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓――鮮卑遺蹟輯錄之三」『文物』一九七八年三期。

（2）謝寶富「北魏金陵、桑乾、北邙、乾脯山西葬區研究――兼以此求教于宿白先生」『北京航空航天大學學報（社會科學版）』一九九八年二期。

（3）氣賀澤保規編著、郭玉堂原著『復刻 洛陽出土石刻時地記――附 解說・所藏墓誌碑刻目錄』汲古書院、二〇〇二年。

（4）金陵は正史に「盛樂金陵」「雲中金陵」「金陵」と複數の表記があり、これに關わる諸說については松下憲一氏が詳細に檢討されている（松下憲一「『定襄之盛樂』と『雲中之盛樂』――鮮卑拓跋國家の都城と陵墓――」『史朋』四

○號、二〇〇七年）。氏は、金陵は盛樂と雲中の二箇所にあったと結論される。一方、古鴻飛氏は金陵を三箇所とし（「北魏金陵初探」『山西大同大學學報（社會科學版）』二二巻五號、二〇〇八年）、劉溢海氏は盛樂一箇所とされる（「北魏金陵初探」『北朝研究』第六輯、二〇〇八）。金陵が一箇所か複數箇所かを考える上で、『水經注』巻三・河水に引く『魏土地記』の「雲中城東八十里有成樂城、今雲中郡治、一名石盧城也」の「今」がいつを指すのかが問題となる。松下氏は雲中郡の設置時期を考證し、その時期を孝文帝の洛陽遷都以後とされ、盛樂金陵と雲中金陵を同一のものとしていた胡三省以來の說を否定された。だが、この場合は『魏土地記』の成書年代を考えるのが有效であろう。この點については山田勝芳氏による考證がある。山田氏は、本書は崔浩を中心に編纂された『大魏土地記』であり、太武帝の華北統一以前に成ったものと結論づけられる（「『水經注』引用の『魏土地記』について」『集刊東洋學』六〇號、一九八八年）。筆者もその見解に贊意を表すものであり、明元帝以降、「雲中金陵」と表記されるのは盛樂が雲中郡治になった歷史的な經過を反映したものとみなし、金陵は盛樂一箇所と考えておく。

（5）北魏以前の前漢、魏晉の陪葬については拙著『漢魏晉南北朝時代の都城と陵墓の研究』汲古書院、二〇一六年、第一篇第二章、第二篇第一章、後漢については盧青峰「東漢帝陵有關陪葬墓問題的思考」（洛陽市文物第二工作隊編『洛陽漢魏陵墓研究論文集』文物出版社、二〇〇九年）參照。皇帝陵とは一義的には皇帝の墓であるため、皇帝陵の他に皇后陵、妃嬪の墓が隣接する場所に造られる。その上で、皇帝陵の周邊には建國の功臣、高官さらに外戚が陪葬される。これまで確認されている事例では、前漢も後漢も陪葬を許された者は自身の墓だけでなく、周圍を區劃して家族墓地を形成することが多い。

（6）山西省大同市博物館・山西省文物工作委員會「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』一九七二年三期。

（7）向井佑介「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」『東洋史研究』六八巻三號、二〇〇九年、同「北魏平城時代における墓制の變容」『東方學報』八五巻、二〇一〇年。曹臣明「平城附近鮮卑及北魏墓葬分布規律考」『文物』二〇一六年五期。

（8）太武帝期のこととして、『魏書』巻三八・王慧龍傳に「時制、南人入國者皆葬桑乾」とある。

（9）張慶捷・劉俊喜「北魏宋紹祖墓出土磚銘題記校釋」（大同市考古研究所編『大同雁北師院北魏墓群』文物出版社、二〇〇八年）。ただし向井氏は報告書の人骨鑑定の結果、北族の特徵があること、習慣的な乘馬によると思われる骨の變形があることから、墓主が鮮卑化していたことに留意されている。前掲註（7）「北魏平城時代における墓制の變容」。

（10）『北史』巻一五・北魏宗室列傳・常山王遵傳附城陽宣公忠（昭成帝曾孫）の傳に「太和四年、病篤辭退、…及卒、皆悼惜之、謚曰宣、命有司爲立碑銘」とある。

（11）室山留美子「北魏官人官僚とその埋葬地選擇」『東洋學

報』八七巻四號、二〇〇六年。

(12) 方山上の永固陵の遺蹟については詳細な調査圖は今なお公開されていないが、萬年堂（孝文帝壽陵）の北方に墳丘狀の遺構が存在し、陪葬墓の可能性が指摘されている。これらの遺構は未調査のため今後の課題としたい。ここでは略圖が掲載されている王雁卿「北魏永固陵陵寢制度的幾何點認識」『北朝研究』第七輯、二〇一〇年を擧げておく。

(13) 拙稿「北魏永固陵の造營」（前掲拙著所收、初出二〇〇〇年）、岡村秀典・向井佑介「北魏方山永固陵の研究 ——東亞考古學會一九三九年收集品を中心として」『東方學報（京都）』八〇卷、二〇〇七年。

(14) 洛陽周邊の地形については鹽澤裕仁『千年帝都 洛陽——その遺蹟と人文・自然環境』雄山閣、二〇一〇年に詳しい。

(15) 窪添慶文「本貫、居住地、葬地から見た北魏宗室」『魏晉南北朝官僚制研究』汲古書院、二〇〇三年所收（初出は二〇〇二年）。

(16) 前掲註(7)向井「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」。

(17) 本稿では墓誌の釋文については趙超『漢魏南北朝墓誌彙編』天津古籍出版社、一九九二年、羅新・葉煒『新出魏晉南北朝墓誌疏證』中華書局、二〇〇五年、王連龍『新見北朝墓誌集釋』中國書籍出版社、二〇一三年に依り、他に適宜、發掘報告を參照している。

(18) 以下に述べる北魏墓の場所については全て同書による。郭氏の記錄については元乂墓のように、調査の結果位置が若干ずれていたことが判明した事例もある（洛陽博物館「河南洛陽北魏元乂墓調査」『文物』一九七四年一二期）。さらに叔孫協墓誌のように、同書に出土地が著錄されているものの、後に墓誌が僞造だったとする證言が出るなど（趙振華「近代洛陽復刻僞造墓誌考述」『洛陽古代銘刻文獻研究』三秦出版、二〇〇九年）、その確度については發掘等により檢證されることが望ましい。ただ、今擧げた元乂の事例でも今回の檢討の範圍では十分に資料として耐えうる。若干の危うさはあるが、墓誌の出土地＝墓の位置と考えて以下の考察を進める。

(19) 長陵が壽陵であることは、以下の史料參照。『北史』卷一三・皇后列傳・文成文明皇后馮氏傳「初、帝孝於太后、乃於永固陵東北里餘營壽宮、遂有終焉瞻望之志。及遷洛陽、乃自表瀍西以爲山園之所、而方山虛宮號曰萬年堂云。」

(20) 劉連香「北魏馮熙馮誕墓志與遷洛之初陵墓區規劃」『中原文物』二〇一六年三期。

(21) 孝明帝の定陵は、張寧・王悅の墓誌から元氏宗室墓群の東方、西山嶺頭村附近にあることが分かる。附近で該當する北魏墓は墳丘徑一〇五メートルの玉冢である。この規模は長陵の一〇三メートル、景陵の一一〇メートルと同じであり、陵の規格や構造はこれまでの皇帝陵と同等につくられていたことが分かる。玉冢については洛陽市文物考古研究院「洛陽孟津後溝玉冢調査勘探報告」『洛陽考古』二〇一四年三期參照。

(22) ただし元繼も爽も乂より遲れて歿している。江陽王家に

關わる墓誌で最古のものは永平元年（五〇八）に埋葬された元繼の次妃石婉のもので、墓誌が見つかった場所は元氏墓が集中する張羊村の西である。ここが本來豫定されていた江陽王家墓地とすれば、元乂だけではなく、繼や爽も本來の墓地から離れて新たに墓地が設定されたことになる。ただ、この場合でも元乂墓が家族墓地から離れていることは變わらない。元繼と爽の墓は、『時地記』に爽墓の位置を「距元繼墓甚近」と記すように同一の墓地である。

(23) 元乂墓については前掲註(18)報文參照。言うまでもなく、現存する墳丘は本來の規模から多かれ少なかれ削られたものである。ここに擧げる數値は現存墳丘のものであり、本來の大きさはこの數値以上であったことになる。

(24) 元愉は宣武帝期に反亂を起こしており通常の埋葬はされていない。『北史』には「斂以小棺、瘞。…後靈太后令愉之四子皆附屬籍、追封愉臨洮王。寶月乃改葬父母、追服三年」とあり、孝明帝期に王として埋葬された。

(25) 元懌墓については洛陽博物館「洛陽北魏元邵墓」『考古』一九七三年四期、徐嬋菲「洛陽北魏元懌墓壁畫」『文物』二〇〇二年二期。

(26) 前掲註(11)。

(27) 叔孫氏の叔孫協の墓誌が『洛陽出土石刻時地記』に著錄されているが、註(18)に述べたように僞刻とする證言があり、檢討から外しておく。

(28) 北邙北魏墓群の鮮卑有力氏族で墓誌が複數出土しているのは、穆氏の七方、于氏の四方、長孫氏の三方である。長孫氏の墓誌出土地は分散し、于氏も二箇所に分かれる。穆氏墓地は瀍東に比較的まとまっているが、これは穆平國と子の亮の系統を中心とする墓地とみられ、平國の弟正國の孫の簒の墓は瀍西にあり、穆氏の墓地も分散していたと思われる。六朝期の漢族の墓群については本貫から離れた東晉の琅琊王氏や陳群謝氏の墓群の在り方が參考となる。六朝墓地については雛厚本主編『江蘇考古五十年』南京出版社、二〇〇〇年參照。

(29) 川本芳昭「北族集團の崩壞と太和二十年の謀反・北鎭の亂」『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八年。

(30) 墓誌に「附葬季父司空文穆公神塋之左」とあり、李沖墓附近に埋葬されたことが分かる。

(31) 前掲註(20)。

(32) 乾脯山については『北堂書鈔』卷一四五・酒食部四・脯篇に引く陸機『洛陽記』に「乾脯山、在洛陽北去三十里、於上暴肉因以爲名」とある。方位を洛陽の「北」とするのが問題だが、『文選』卷三八・表下「傅季友爲宋公至洛陽謁五陵表」の注に引く郭緣生『述征記』には「北邙東、則乾脯山」とあり、北邙の東側で首陽山の西と考えていいだろう。

(33) 馮聿墓誌については、宮萬瑜「邙洛近年出土馮聿、源模、張懋三方北魏墓誌略考」『中原文物』二〇一二年第五期に拓影と釋文を載せるが、出土地についての情報はない。本稿の圖では墓誌と馮熙・誕墓誌の出土位置の大まかな情報から、首陽山西端周邊と想定している。

(34) 孝文帝が馮誕の墓地の設定に關與していたことは、『魏書』卷八三上・外戚傳上の「禮物轜儀、徐州備造、陵兆葬事、下洛候設」という記述から窺うことができる。

(35) なお長樂信都馮氏に關聯する墓誌として馮邕の妻元氏の墓誌が洛陽西方、北魏皇帝陵區の南方に位置する東陡溝村の西で發見されている。元氏は司空を追贈された元暉の娘である。馮邕と熙らとの關係は不明だが、元氏の女性との婚姻關係から同族の可能性がある。元氏の歿年、埋葬年ともに正光三年であり、そうすると、馮氏の塋域は孝明帝期に移動していた可能性もある。

(36) 『魏書』卷六三・王肅傳「景明二年薨於壽春、年三十八。世宗爲擧哀、詔曰「肅奄至不救、痛惋兼懷、可遣中書侍郎賈思伯兼通直散騎常侍撫慰厥孤、給東園祕器・朝服一襲・錢三十萬・帛一千匹・布五百匹・蠟三百斤、幷問其卜遷遠近、專遣侍御史一人監護喪事、務令優厚。」又詔曰「死生動靜、卑高有域、勝達所居、存亡崇顯。故杜預之歿、窆於首陽。司空李沖、覆舟是託。顧瞻斯所、誠亦二代之九原也。故揚州刺史肅誠義結於二世、英惠符於李杜、平生本意、願終京陵、既有宿心、宜遂先志。其令葬於沖、預兩墳之間、使之神遊相得也。」」ただし、肅の子の紹は延昌四年八月に死去しているが、既に見たように元氏墓群内に埋葬されており、李氏墓群とは違い王氏の墓地は移動している。

(37) 北朝の漢族の主な墓群を擧げておく。張李「河北景縣封氏墓群調査記」『考古』一九五七年三期、孟昭林「記後魏邢偉墓出土文物及邢蠻墓的發現」『考古』一九五九年四期、河北省文管處「景縣北魏高氏墓發掘簡報」『文物』一九七九年三期。他に弘農の楊氏も本貫地の華陰で北朝期の墓誌が出土しており、墓群を營んでいたことが分かる。

(38) 前掲註(11)。

(39) 北魏の正統觀については川本芳昭「五胡十六國・北朝時代における「正統」王朝について」『魏晉南北朝時代の民族問題』汲古書院、一九九八（初出、一九九七年）、田中一輝「代北と中原――北朝の史學と正統觀――」『東洋史研究』七五卷三號、二〇一六年參照。

(40) 『北史』卷一三・皇后列傳上・孝文文昭皇后傳「宣武踐阼、追尊配饗。后先葬在長陵東南、陵制卑局、因就起山陵、號終寧陵、置邑戶五百家。明帝時、更上尊號太后、以同漢・晉之典、正姑婦之禮、廟號如舊文昭。遷靈櫬於長陵兆內西北六十步。初、開終寧陵數丈、於梓宮上獲大蛇、長丈餘、黑色、頭有王字、蟄而不動、靈櫬既遷、還置蛇舊處。」

(41) 前掲註(13)、拙稿。

(42) 琅琊王氏關聯墓誌では北陳莊村で發見された王誦の妻で彭城王元勰の娘である元氏のものが最も古い。ただし、この墓誌は永平三年（五一〇）という死去年を記すだけで、埋葬年を記しておらず、埋葬が遲れた可能性もある。

(43) 石井仁「虎賁班劍考―漢六朝の恩賜・殊禮と故事」『東洋史研究』五九卷四號、二〇〇一年。

(44) 前掲註(13)、拙稿。

(45) 『魏書』卷五五・劉芳傳「高祖自襲斂暨于啟祖・山陵・練除、始末喪事、皆芳撰定。」

(46) 前掲註(43)石井論文。參考までに馮熙と馮誕の葬送の様子を『魏書』巻八三の傳から見ておきたい。馮熙は「將葬、贈假黄鉞・侍中・都督十州諸軍事・大司馬・太尉・冀州刺史、加黄屋左纛、備九錫、前後部羽葆鼓吹、皆依晉太宰・安平獻王故事」、馮誕は「贈假黄鉞・使持節・大司馬・領司徒・侍中・都督・太師・駙馬、公如故。加以殊禮、備錫九命、依晉大司馬、齊王攸故事」とある。馮誕の葬禮には西晉の司馬攸の故事が用いられているが、攸の葬禮は『晉書』巻三八・齊王攸傳に「詔喪禮依安平王孚故事、廟設軒懸之樂、配饗太廟」とあるように、安平王の故事に基づいており、同じものである。

(47) 元勰の葬禮は正史の傳に記載はないが、清河王元懌の墓誌には懌の葬禮が勰の故事に依ったとあり、さらに『洛陽伽藍記』巻四に懌の葬禮は「依晉安平王孚故事」とある。

(48) 司馬伷の葬禮は『晉書』には明らかでなく、劉昶の葬禮を『魏書』の傳から記しておく。「加以殊禮、備九錫、給前後部羽葆鼓吹、依晉琅邪武王伷故事、謚曰明。」

(49) 「廣陽王」は廣陽懿烈王の嘉のことと思われるが嘉の傳に葬禮の記載はなく、あるいは「廣陵王」の誤記の可能性もある。崔光の葬禮を『魏書』の傳から記しておく。「又敕加後部鼓吹・班劍、依太保・廣陽王故事、謚文宣公。」

one of differentiation or different but equal, but rather should be grasped as a continuation/expansion relationship.

Thus, this article posits the establishment process of the Qin state government, divides that process into three major periods, and discusses how more of the older laws established in the mid Warring States period are preserved in the important *Yunmeng Shuihudi Qin jian* 雲夢睡虎地秦簡 bamboo slips than in contemporaneous late Warring States period documents.

THE COMPOSITION AND TRANSITION OF THE TOMBS ON MANGSHAN DURING THE LUOYANG ERA OF THE NORTHERN WEI

MURAMOTO Ken'ichi

In regard to the tombs on Mangshang 邙山 that the Northern Wei built after transferring the capital to Luoyang, Su Bai 宿白 pointed out that the custom of clan burial was still maintained by the Xianbei 鮮卑 and his theory still has great influence today. This theory postulates that the sinification policy of the Emperor Xiaowen 孝文帝 did not extend to funerary customs. In this paper I trace the changes in the Mangshan tombs and examine the theory of Su and consider what the dynasty sought in the configuration of the tombs.

As for the tombs established by Emperor Xiaowen immediately after the transfer of the capital to Luoyang, the imperial tomb was placed on the western edge and the imperial Yuan clans tombs nearby, while the tombs of high-ranking officials of the Han people were placed in the vicinity of the tomb of Western Jin DuYu 杜預 in the east. The separation of the Xianbei and Han tombs that had existed since the Pingcheng 平城 period was maintained. During the reign of Emperor Xuanwu 宣武帝, the imperial family tombs were located to the east of the Chanhe river 瀍河, and on the west bank of the Chanhe was the emperor's own tomb. It is also a distinctive characteristic of this period that only members of the imperial family and emperors' wives were buried in the accompanying satellite tombs built around the emperors' tombs. In the reign of Emperor Kaoming 孝明帝, the intervention of the emperor and empress regarding the placement of imperial family's tombs increased, and determining locations of tombs became a means of dominating the imperial family. The tombs of maternal relatives also came to be regarded as accompanying satellite tombs.

Burial within the imperial tomb complex of the Northern Wei tombs on Mangshan was limited only to members of the imperial family and emperors' wives and maternal relatives, and there is no record of even influential Xianbei, to say nothing of Han people, being allowed to have accompanying satellite graves within the imperial tomb complex. Examining changes after the transfer of the capital to Luoyang, we see the greatest goal continued to be securing a burial site for the Xianbei who had moved south. In addition, we note that the Northern Wei dynasty first established the superiority of the imperial Yuan clan based on the configuration of tombs. Then, in the reign of Emperor Xuanwu another change was the existence of an area especially dedicated to imperial tombs. Next,during the reign of Emperor Kaoming, the emperor intervened in the selection of tombs for imperial kin. In this way the intent to determine the configuration of tombs consistently corresponds to the establishment of imperial power. Moreover, it is difficult to regard the placement of tombs as a reflection of the clan system as Su had claimed. It would be more appropriate to consider it a natural concentration of family tombs just as was the case with the Han people. In general, the Northern Wei tombs on Mangshan can be understood in the course of sinification, resembling the Han practice, in terms of tomb arrangement, structure, funeral ritual and so on, but with respect to tomb configuration and accompanying satellite graves, practices were distinct from those of the Han dynasty, functioning as one means to strengthen the emperor's power while resolving political problems at one time or another.

ΦΡΜΑΛΑΡΟ AND PRM'NΔ'R : A COMPARATIVE STUDY OF LOCAL OFFICIALS IN TUKHĀRISTĀN AND SOGD

MIYAMOTO Ryoichi

By grace of new information from the Bactrian documents which were deciphered and edited by N. Sims-Williams, we can now research several new subjects on the history, geography and society of Tukhāristān. In this article, we consider φρομαλαρο, which was one of the local officials in the region. Although we have new documents, these are not enough to allow us to investigate the title in detail. Therefore, we also deal with a Sogdian title prm'nδ'r mentioned in the Mugh documents, whose etymology is the same as φρομαλαρο, and then compare the functions of these two officials.

By examining the Bactrian documents which mention φρομαλαρο, we find that